

【 復活讃詞 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖 神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 爲

どうていぢよよりうまれしものをほめうとって
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしのみそのこ
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給

【 洗礼祭前期の讃詞 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

むかしイリヤがのぼりてのち、イオル
 昔 上 後

ダンがわ は エリセイの ころも によりてかえり
 河 衣 由 反
 て、みづさゆうにわか れ、うるお
 水 左右 分 濕
 いたるみちはかれのためにかわけるみちとな
 路 彼 爲 乾 路 爲
 れり。これじつにせんれいのかたどり
 此 實 洗礼 形 象
 なり、けだしわれらはこれによりて
 蓋 我 等 此 由
 いのちのながるるみちをわたる。ハリストスは
 生命 流 途 渉
 みづをせいにせんためにイオルダンにあらわれた給
 水 聖 爲 現 給
 まえり。

【 洗礼祭前のコンダキオン 第4調 】

いまもいつ もよよに、アミン。
 今 何時 世 世
 しゅはこんにちイオルダンのながれにありてイオアンに
 主 今日 流 在
 よ呼ぶ、われにせんをさづくるをおそる
 我 洗 授 畏

る な か れ 、 け だ し わ れ は は じ め て つ く ら
 母 蓋 我 始 造
 れ し ア ダ ム を す く わ ん た め に き た れ り 。
 救 爲 來

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行ふ者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光榮は父と子と聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいにるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、ヘルヴィムに座ざする者ものよ、爾なんぢは其その國
 の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よよも世よよに、)

【 提綱 (プロキメン) 洗礼祭前の主日 第6調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

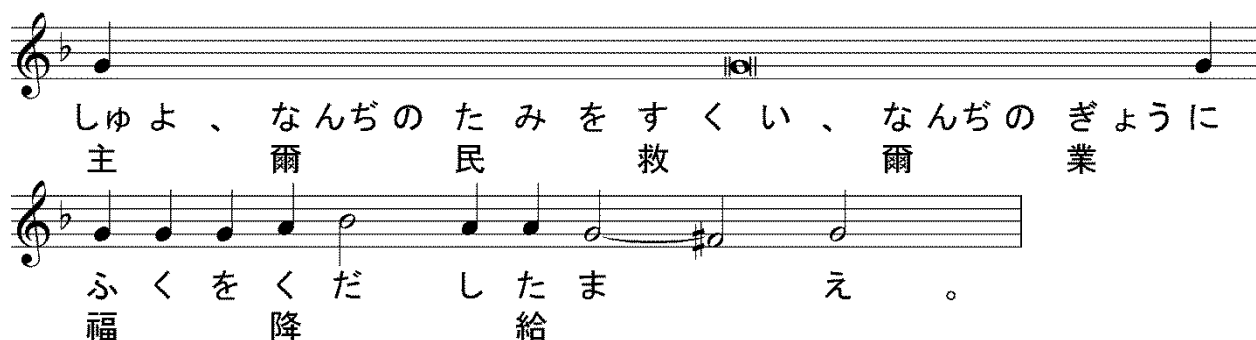


司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{たみ} の民を ^{すく} 救い、^{なんぢ} 爾 ^{ぎょう} の業に ^{ふく} 福を ^{くだ} 降し ^{たま} 給え、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われなんぢ} 我 爾 ^よ に呼ぶ、^{われ} 我 ^{かため} の防固よ、^わ 我 ^{ため} が爲に ^{もだ} 黙す ^{なか} 母れ、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{たみ} の民を ^{すく} 救い、



【 使徒經 (アポストロス) 298 端 ティモフェイ後書4章5節~8節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{たつ} パヴェルが ^{こうしょ} ティモフェイに ^{よみ} 達する ^{よみ} 後書の ^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^こ 子 ^{なんぢ} ティモフェイよ、^{いつさい} 爾 は ^{こと} 一切の ^{けいせい} 事に ^{くるしみ} 徹醒し、^{しの} 苦 を ^{ふくいんしゃ} 忍び、^{わざ} 福音者の ^{おこな} 工を行 ^{おこな} い、

なんぢ しょく つく けだしわれすで まつり けん わ ゆ ときいた われよ たたかい
 爾の職を盡せ。蓋我已に祭として獻ぜらる、我が逝く時至れり。我善き戦を
 たたか は みち つく しん まも いま のち ぎ かんむり われ ため そな しゆ
 戦い、馳すべき程を盡し、信を守れり。今より後、義の冕は私の爲に備えらる、主、
 ぎ しんぱんしゃ か ひ おい これ われ たま ただわれ すなわちおよ かれ あらわれ
 義なる審判者は、彼の日に於て、之を我に賜わん、第我のみならず、乃凡そ彼の顯現
 した もの たま
 を慕う者にも賜わん。

(比較用 口語訳) ティモフェイよ、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。

司祭) なんぢ へいあん
 爾に平安、

誦經) なんぢ しん
 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 洗礼祭前の主日 第8調 】

司祭) えいち
 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) かみ われら あわれ われら ふく くだ
 神よ、我等を憐み、我等に福を降せ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
 ア リ ル イ ヤ 。。

誦經) ^{なんぢ かんばせ もつ われら たら たま} 爾の顔を以て我等を照し給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅぎい わ ところ かみ し ちえ いぎぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書1端 1章1~8節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き} 謹みて聴くべし、

司祭) ^{かみ こ ふくいん はじめ しよげんしゃ する ごと いわ み} 神の子イイススハリストスの福音の始なり。諸預言者に録されしが如し、云く、視

われわ つかい なんぢ めんぜん つかわ なんぢ さき なんぢ みち そな の よ
 よ、我我が使を爾の面に遣し、爾に先だちて、爾の道を備えしめん。野に呼ぶ
 もの こえあ い しゅ みち そな そのこみち なお の あ せん さづ
 者の聲在りて云う、主の道を備え、其徑を直くせよと。イオアン野に在りて洗を授け、
 つみ ゆるし ため かいがい せんれい つた ぜんちおよ ひとびとい
 罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳えたり。イウデヤの全地及びエルサリムの人々出でて、
 かれ つ おのれ つみ みと みな がわ おい かれ せん う らくだ
 彼に就き、己の罪を認めて、皆イオルダン河に於て彼より洗を受けたり。イオアンは駱駝
 けごろも き こし かわ おび つか いなご のみつ くら かれの い われ あと さら
 の毛衣を衣、腰に皮の帯を束ね、蝗蟲と野蜜とを食えり。彼宣べて曰えり、我の後に更
 われ つよ もの きた われかが そのくつ ひも と た われ みづ もつ なんぢら
 に我より強き者は来る、我屈みて、其履の帯を解くにも堪えず。我は水を以て爾等に
 せん さづ せん さづ かせいしん もつ なんぢら せん さづ
 洗を授けたり、彼は聖神を以て爾等に洗を授けん。

(比較用 口語訳) 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。預言者イザヤの書に、「見よ、わたしは使
 をあなたの先につかわし、あなたの道を整えさせるであろう。荒野で呼ばわる者の声がする、『主の道を
 備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』と書いてあるように、バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の
 ゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えていた。そこで、ユダヤ全土とエルサレムの全住民と
 が、彼のもとにぞくぞくと出て行って、自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受け
 た。このヨハネは、らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物として
 いた。彼は宣べ伝えて言った、「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる。わたしはかがん
 で、そのくつのひもを解く値うちもない。わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によ
 ってバプテスマをお授けになるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸